

文字もじ MOJI の世界

58. 情報アクセシビリティへの道

小林龍生*

ご隠居さん：これはこれは、幡随院の親分、めずらしいね。

親分：へい、ご隠居さん。ご無沙汰してやんす。なに、ちょっとこのあたりで、もめ事があってね。その仲裁に。

ご隠居さん：しかし、親分が仲に入ると、かえって火に油を注ぐことになったりして。近ごろは、おとなしくしているのかい。

親分：へい、あつしも、それなりに歳をとりましてね。若いころの罪滅ぼしに、アクセシビリティ分野でちっと動き回っている次第で。

ご隠居さん：何だい、その情報アクセシビリティってやつは。

親分：さすが、ご隠居さん、分からないことは素直に聞く。今どきの若者に、爪の垢を煎じて飲ませたいものだ。目や耳の不自由な人たちが、なぜか文字が頭に入ってこない人たちが、エレキや電子飛脚を使ってやりとりや読み書きをできるようにしようってわけで。

ご隠居さん：この前に会ったときは、えらく怒っていたねえ。老中の一人が出した御触書が、アクセシビリティを思いっきり曲解してると言っていたじゃねえか。

親分：あんときは、ホント、八つ裂きにしたいぐらい頭に血が上りやした。貧困対策も、地域格差対策も、UX もみんなアクセシビリティだと言い張って、もうやっているから何もい

らないと言わんばかりのお触書でしたよ。¹⁾でも、あの後で、お触書は思いっきり書きなおされたんで。文句なしとは言わねえが足を引っ張るような真似はしたくねえ。しばらくお役人のお手並み拝見というところで。

ご隠居さん：ほう、それは良かった。親分さんがいろいろ言っていたのが伝わったのかもしれないな。

親分：世の中、そう捨てたもんじゃねえってことで。

ご隠居さん：最近、障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法なんていうのも出来たそうだな。親分さんも嬉しいだろう。

親分：ところが、あいつを見ると情けなくて仕方がねえ。たった5ページしかねえ。中身はスカスカもいいところ。お題目が並んでいるだけの理念法というやつ。「努めなければならない」というのは、頑張りましたけどダメでしたと言えればそれでいいということだろ？毒にも薬にもなりやしない。なんでも、政治家の点数稼ぎのための議員立法なんだそう。

それに引き換え、欧州アクセシビリティ法というのは立派なもんだ。45ページもあって、とっても具体的な要件がてんこもりだ。たとえば、デジタル著作権管理のせいで読み上げ出来ませんかというの駄目だと念を押してある。そして、ちゃんとやらないと罰則がお待ちかね。おかげで、欧州の民間業者は、ちかごろ情報アクセシビリティ対策に大わら

1) 世界最先端デジタル国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画の変更について（決定、内閣官房、令和3年6月18日）

わだ。こうじゃないと世の中は変わりやしねえ。

ご隠居さん：それは、親分さんが落胆するのはもつともだ。しかし、毒にも薬にもならない法律でも、ないよりはマシかもな。何かやらんといけないという気分だけは盛り上がるだろう？

親分：確かに、ないよりはマシなのかも知れませんが。議員立法なんてそんなもんだと諦めるしかなさそう。

ご隠居さん：そうそう。怒ってばかりいたんじゃ血圧が上がるよ。

親分：もう一つ、あつしが怒りまくっているのは、読み上げのことしか考えりゃいいんだろうという最近の風潮でさあ。お上も商人も、読み上げだけでいいんだとタカをくくっていやがる。

ご隠居さん：そのどこがいけないんだい？情報アクセシビリティとは読み上げのことなんだろう？紙に書かれたものが読めない盲人のために、コンピュータで読み上げをするというのはいい話じゃねえか。

親分：ご隠居さんでさえ、そう思っているとは本当に情けねえ。もちろん、読み上げが良いことには決まってまさあ。しかし、それだけじゃ、まったくねえんだ。

目の見えない人でも使えるような建物をこさえるとか、電車に乗れるようにするとか、情報機器をできるようにするとか、文書を音声読み上げすることは、もちろん大事なこつた。しかし、弱視の人だっていっぱいいて、全盲の人より多いぐらいだ。人の頭ぐらいもある文字を黒板に書いても読めない人に会ったときは魂消たが、そういう人も自分の目で見たいと思っていなさる。

ディスレクシアとって、目も見えて、頭もちゃんとしているのに、なぜか文字が読めないという難儀な目に逢う人もいらっしやる。こちらは弱視の方々のさらに何倍かだ。周り

にも本人にも何で自分だけ読めないのか分からんだけに、学校では本当に辛い思いをなさるようだぜ。目が縦に並んだら縦書きが読めるようになるのにと毎日思っていたという人の話を聞いたときは、あつしや目から涙がこぼれた。

ところがアクセシビリティと云ったらWebページの読み上げのことしか考えねえのが、このごろの流行だわな。おかげで、弱視やディスレクシアの人のことは、ほつたらかしだ。そういう方々だつて、目で読みたいという思いは強いんだぜ。読み上げだけじゃダメなんだよ。漢字に弱い人のためのルビだつて大事なもんだが霞が関のお役人や、政治家は考えもしやがらねえ。耳が聞こえない人は、ルビがないと漢字の読みを間違えて覚えちまうんだぜ。

ご隠居さん：おつ、調子が出て来たね。幡随院節全開だ。年とつて丸くなったなんて、とんでもねえ。これじゃあ、湯殿で刺し殺されても仕方ないわな。

親分：視覚障害者といつても、じつは、いろいろな人たちがいてね。印刷物を読めない障害のうち、全盲はごく少数なんだが、それしかないように世の中では思われている。盲人は隠しようがねえが、ディスレクシアの人がそうだと公言していることはめつたにありやせん。結果的に、ディスレクシアは顔が見えねえ。

ご隠居さん：わしは極度の近眼で老眼、家族は遠視、乱視、老眼でね。近眼は読む距離を近くにすれば、なんとかなるが、老眼は近づけては読めやせん。メガネと拡大鏡は手放せません。これは読みにくいと、しばしば文句をつけている。

ディスレクシアやロービジョンの方への対応を考えることは、わしら老人への対応でもあるように思えるがねえ。

親分：ご隠居さんのおつしやるとおり。どこのだれとも分からない一般論じゃなくつて、具体

トルマ

的に困っている人たちの現実から目をそらさないで、解決策を探って、その解決策が他の人たちにとってもハッピーな結果になるのが理想ですな。

ご隠居さん：おっ、最後は、親分も真つ当なことをおっしゃって。久々に、向かいの蕎麦屋で一杯やりますか。 ■

【付記】

今回をもって、この「落語シリーズ」は、一旦終了することとしたい。いささか、雑駁のそりりは免れぬとしても、アクセシビリティも含め、現今の電子書籍とウェブドキュメントの狭間で起きている文字情報技術、特に約物類や和欧文混植を巡る問題圏についての概略は素描できたのではないかと考えている。

今回分も含めシリーズ中、一般的にはやや不穏当とも取れる文言が散見されるが、立場の違いを明確にするため、あえて誇張したところがあることをご理解いただくとともにご寛恕いただきたい。

文責はすべて筆者にある。

今回は、いつもの小林敏さん、田嶋淳さんに加え、JLreq タスクフォースのメンバーでもあり、日本 DAISY コンソーシアム技術委員会の委員長でもある慶應義塾大学の村田真さんにも多大な御協力を賜った。木田泰夫議長を初めとする他の JLreq メンバーを含め、記して謝意を表す。



* KOBAYASHI Tatsuo
文字情報技術促進協議会会長
tlk@kobys.com

広告など (1/2p 枠)